

序文：「乾燥・半乾燥地域の人文・社会」刊行によせて

吉野 正敏

(筑波大学名誉教授、国連大学上席学術顧問、国土環境株式会社顧問)

世界中には乾燥・半乾燥地域が広く存在する。地球温暖化によって、沙漠や草地は拡大するのか、狭くなるのか。沙漠のオアシスに住む人たちが利用できる水は増えるのか減少するのか。幾つもの深刻な問題があるが、これに詳しく自信をもって答えられる人はいない。残念ながら、それが現状で、やっと研究が始まったと言うのが本当の答えであろう。

乾燥・半乾燥地域に生活しているヒト、あるいは、人間社会を中心に考えるならば、自然環境条件の研究は、特にこの十年間は進んだ。言い換えれば、地形・地質・気候・気象・エアロゾルなどの地球化学、植生や草地などの植物生態学、水理学・農業工学・河川工学・建築学・情報通信・エネルギーなどの分野が進歩した。しかし、日本沙漠学会誌や研究発表の論文リストをみても、あるいは、環境省の地球環境研究推進費のこれまでや現在実施中の課題名をみても、「乾燥地域、半乾燥地域に住む人びとの顔が浮かんでくる研究」は、ほとんどないと言っても過言でないと思う。

考古学・歴史学・文化人類学・民俗学など、あるいは、音楽・絵画・彫刻・劇・舞踊・小説など、文化全体を見まわすと、われわれ日本人が世界の乾燥・半乾燥地域で行ったすぐれた実績が幾つもある。テレビの「シルクロード」の番組に釘付けになる日本人の数を考えると、この地域の人びとに関心をもつ日本人がいかに多いか想像がつく。それは、ただの関心ではなく、日本人が抱く「心のふるさと」のようなものではなかろうか。われわれの文化、宗教、思考過程、生活慣習など、あらゆるものがこの地域を通過してきたから、好き嫌いを超越して惹かれるのではなかろうか。

このような一般日本人の状況を、乾燥・半乾燥地域を研究対象とする一研究者の立場からみると、忸怩たるものがある。この雑誌の編集委員会であるとき、このようなことを発言したら各編集委員も同感であったらしく、特に、人文・社会に重点を置いた特集号を刊行することにすぐ決まった。多忙な執筆者各位にご理解とご協力をいただき、この特集号をまとめられたことを嬉しく思っている。